オーロラの国の子ら

A・R・ファンデル・ルフ作

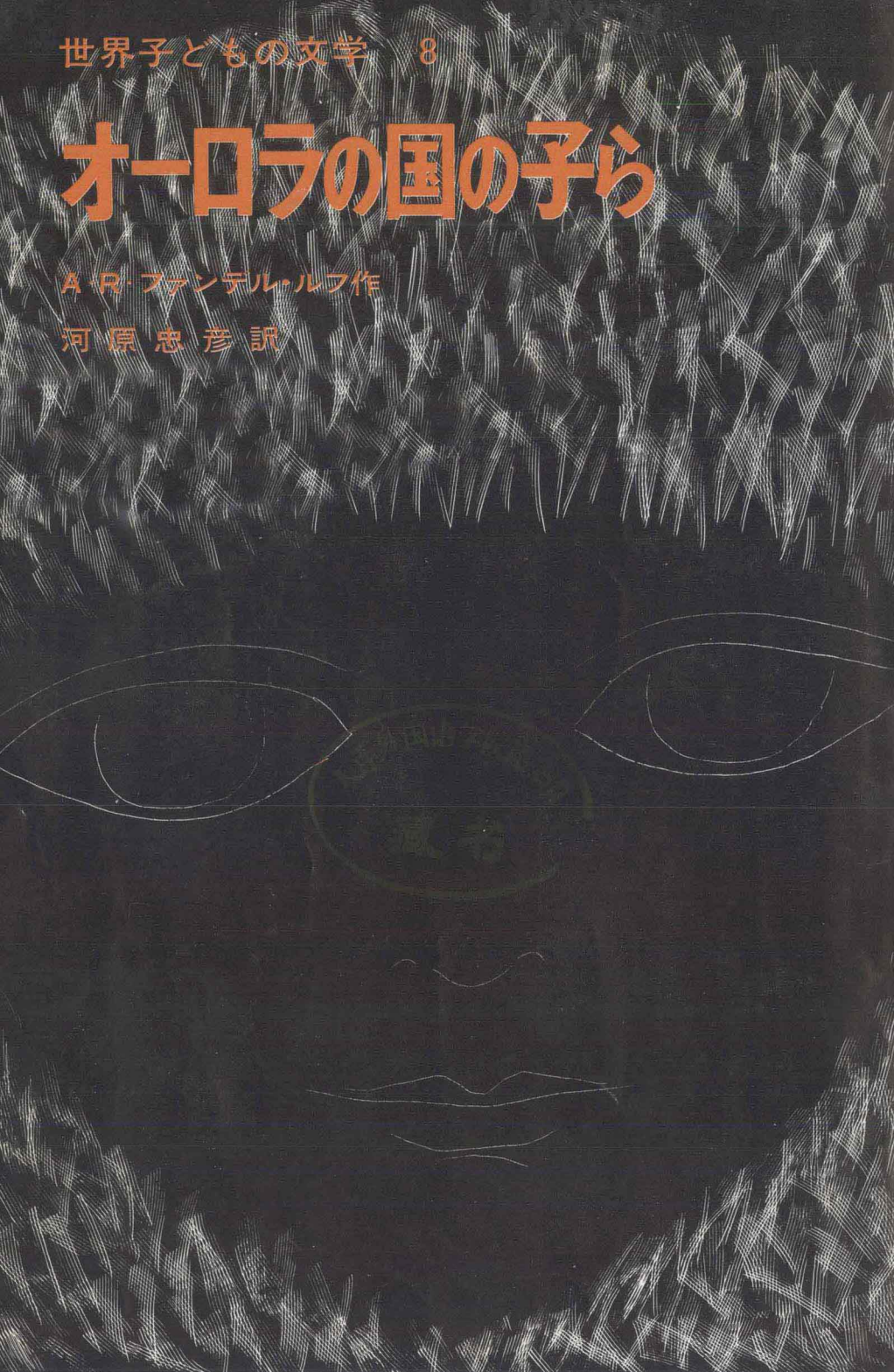
河原忠彦訳

世界子どもの文学　8

オーロラの国の子ら

A・R・ファンデル・ルフ作

河原忠彦訳



ルッヘルス・ファンデル・ルフ，アン
オーロラの国の子ら　アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ作　河原　忠彦訳
ポプラ社　昭和45（1970）
197p　23cm（世界子どもの文学　8）
〔分類〕949

世界子どもの文学・8

オーロラの国の子ら

著　者　アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ
訳　者　河原忠彦（かわはらただひこ）
発　行　昭和45年5月30日©
発行者　久保田忠夫
発行所　株式会社　ポプラ社　（〒160）
東京都新宿区須賀町5　振替東京149271

印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　富士製本株式会社

定価　五〇〇円
（訳者との話し合いにより検印廃止）

（落丁・乱丁本はいつでもお取りかえいたします）

はじめに

わたくしの本を読んでくださる日本の少年、少女のみなさん！

あなたがたが、外国の作家の書いた本を読まれて、ちがった国々の、さまざまな事件や物語をお知りになるというのは、ほんとうにうれしいことです。

でも、いろいろお読みになりますと、わたしたち人間は、世界中のどこでも、だいたい同じものである、ということをあなたがたは発見なさるでしょう。これがおたがいの理解と友情の第一歩になるのです。

こんど日本語に訳された「オーロラの国の子ら」という物語は、ヨーロッパのいちばん北にある国の生活をお伝えしています。まえに訳された「みんなの広場」は、オランダの港町ロッテルダムにみんな暮らしていますが、それぞ

れちがった人種にぞくする子どもたちの物語です。それからもう一つ、「われらの村がしずむ」の舞台は、フランスのオート＝サヴォアです。

ここで、あなたがたにわたくしのほうから一つ、お願いがあります。わたしたちオランダの子どもたちのために、日本のことや、アジアのどこかのお話を書いてくださるように、日本の作家にお願いしてほしいのです。

このあいだ、わたくしは、ドイツのフランクフルトで開かれた大きな書物市で、日本の芸術家の書いたすばらしい、じつにみごとなさし絵入りの子どもの本をみつけました。

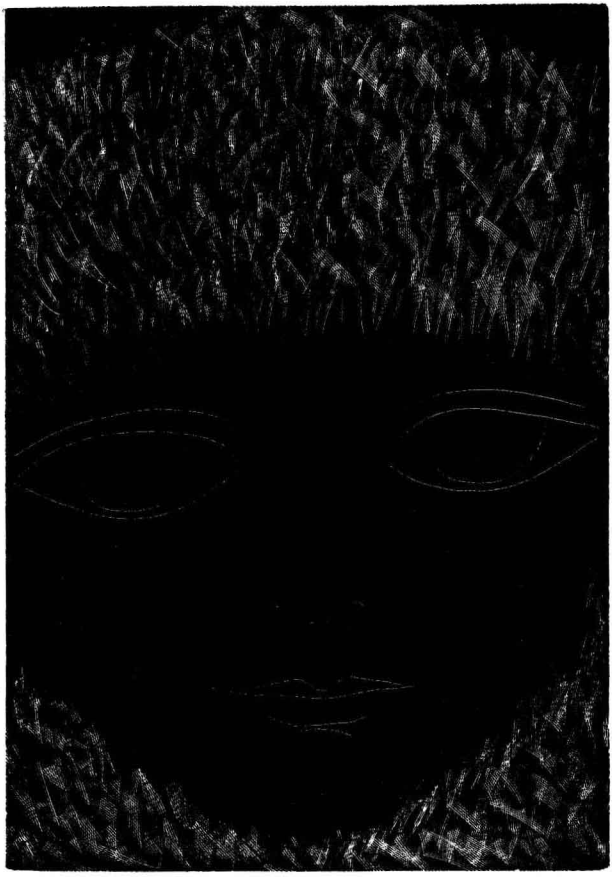
いつかいちど、わたくしも日本をおたずねしたいと思っています。それはわたくしの一つの夢です。あなたがたが学校で、どんな生活をしていらっしゃるのか、みたいと思いますし、またあなたがたと、ぜひお話ししたいものです。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

でも、わたくしは日本語が話せません。ただわたくしの本を通じて、オランダでわたくしたちが何を考え、何を感じているか、それをいくらかでもお伝えすることができるかと思うのです。

では、ごきげんよろしゅう。日本の少年、少女のみなさん、さようなら！

一九七〇年四月　　アン・ルッヘルス・ファンデル・ルフ



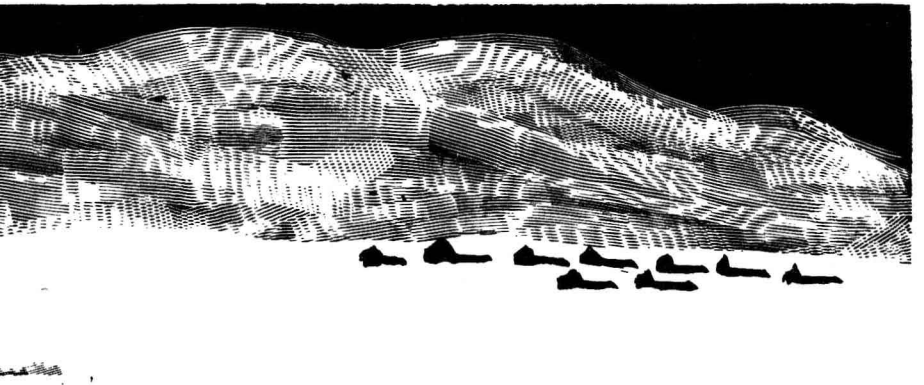
装てい・さし絵　司　修

オーロラの国の子ら

A・R・ファンデル・ルフ作
河原忠彦訳

「いやだ、いやだ、ぼくは、いやなんだ。」
と、ペーアは大声をはりあげました。
「なにがそんなにいやなんだい？」
と、アルネおじさんは、なだめるように少年の背中をたたきながら、たずねました。
「こんなくらやみのなかで暮らすのが、いやなんだ。」
と、ペーアはまたどなりました。
「でも、どこにでも、あかりがついているじゃないか。」
と、アルネおじさんはいいました。
おじさんは、ためらうように、低い声で話をしました。
少年のいうことが、わかりすぎるほどわかっていたからです。こちらへきたばかりの何年かは、おじさんだって、あ

かりがこいしくてしかたがなかったのです。
「うちへ帰りたいよ。」
と、またペーアが大声をだしました。
ペーアはベッドの上をころげまわり、すすりなきを、ふとんのなかでおしころしていました。
「だっておまえ、まだうちへは、帰れないじゃないか。まあ、春にでもなって、おかあさんがまたよくなればだなあ。わかっているだろう、おとうさんは航海にでているのだから、おまえのことをかまってやれないことぐらい。でも、こっちにいれば、マーリットおばさんが、ちゃんとおまえの世話をしてくれるんだよ。」
と、アルネおじさんはいいました。



おじさんは、ことこまかに話してきかせましたが、少年はさっぱり聞いてはいませんでした。ペーアがまるで何もわかっていないみたいな話しぶりでしたから。おかあさんが、冬じゅう、病気で寝ていることも、おとうさんが海に出ていることも、ペーアはちゃんと知っていたのです。

〈自分のことは、自分でできるさ。だれの世話もいらないよ。〉

と、ペーアは考えました。

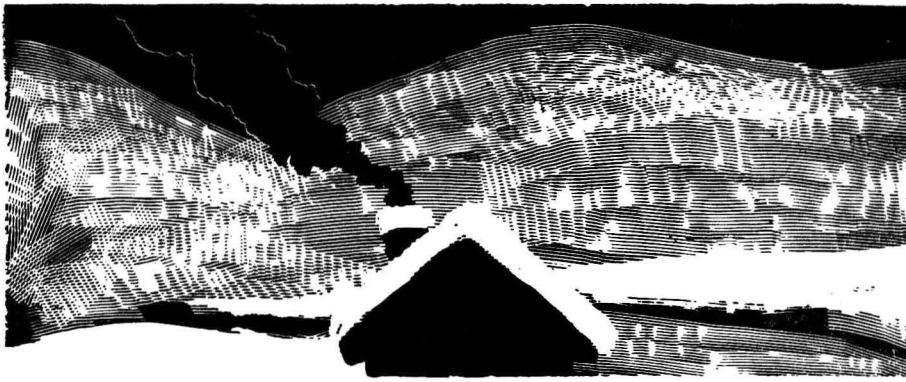
こんなことは、もうなんども考えたことだったのです。

でも、おとなのおじさんも、おばさんも、

「おまえにはできっこない。」

と、いつもいいはるのでした。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com



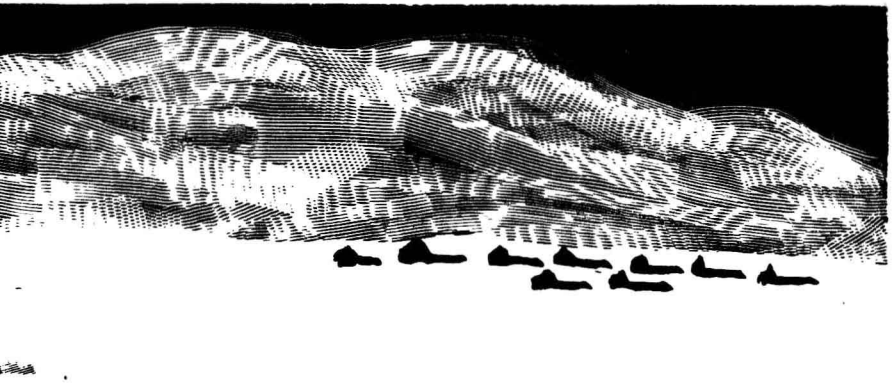
おとなたちは、いつでも、子どもよりずっとよく知っている——すくなくとも、そう、思いこんでいるものなのです。

アルネおじさんは、いかにもぶきように、もういちど少年の背中をたたいてやりました。

〈ぼくは逃げだすぞ。こんなところには、いたくないんだ。日はでないし、どこもかしこも雪ばかりで、ひどく寒いし、暗いし、いつも風が吹きまくっている。いやだ、いやだ。ぼくはこんなところに、もう一日だっていたくない。〉

と、ペーアは思いました。

アルネおじさんが、背をむけたペーアにこういいました。



「なあおまえ、じきになれるものだよ。はじめのうちは、あかりがこいしいし、南の国がなつかしいものさ。だけど、やがてなれるさ。おまけに、北極圏でもずっと北の、この島で暮らして、仕事をするのが、誇らしくなるもんだよ。」

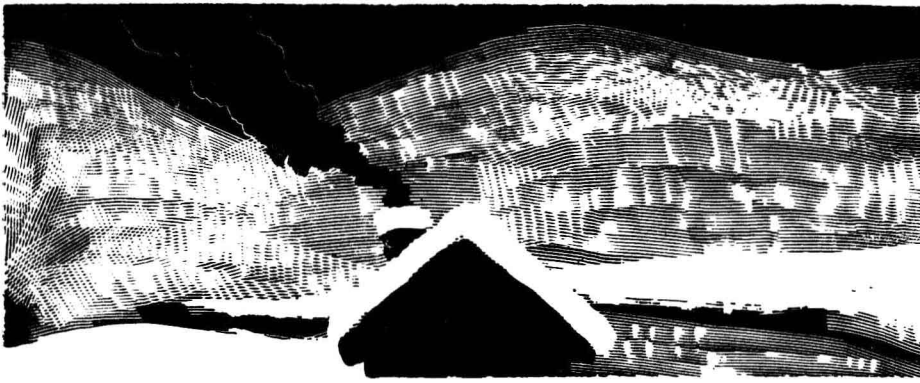
〈それに、わたしはこちらでは、二倍の俸給をもらっている。〉

と、おじさんは考えました。

「とにかく、そんなにひどく暗いわけでもないしね。」

と、おじさんは大きい声をだしました。

「月もあるし、星もある——それにオーロラだってでるんだ。そして太陽の見えない時期は、たったの八週間なん



だよ。」

「八週間もだって――」

と、ペーアはふとんのなかでうめき声をだしました。

〈いつも夜ばかりの八週間だって！〉

「一月の終わりには、太陽がまた顔をだすさ。」

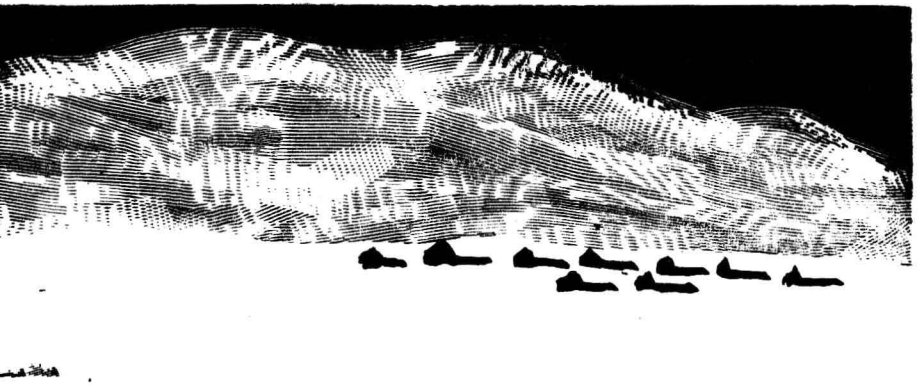
と、アルネおじさんがいいました。

「たったの五分間ね！」

と、ペーアは大声をはりあげ、ふんぜんとして、ぐるっとむこうへ向いてしまいました。

「五分間きりの昼間に、いったい何がのぞめるっていうの！」

「五分間さえないよ。」



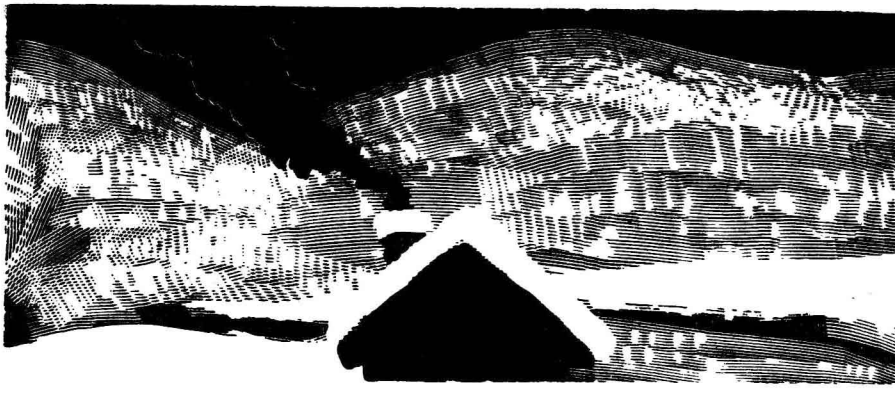
と、アルネおじさんは答えました。

「でもな、太陽のほんの一部分でも、はじめて水平線の上に顔を出すとな、それはもうなんともすばらしいんだよ。みんなわれをわすれて、ぼうっとしてしまうんだ、そしてね……」

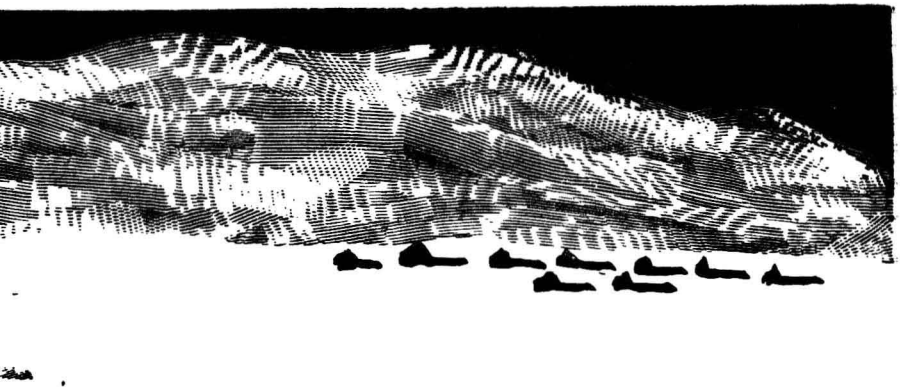
おじさんは黙ってしまいました。南の国からきた少年に、太陽がふたたびあらわれるということが、どんなにすばらしいことか、いったいどうやって説明したらいいでしょうか？

「そんなこと、どうだっていいよ。ぼくはうちへ帰りたいんだ！」

と、ペーアは不平顔でいいました。



「いうことを聞かなければだめだよ。」
と、アルネおじさんは、こんどはかなり荒っぽくいいました。もうがまんできなくなっていたのです。
「かえようもないことには、だれだって、したがわなければならないんだ。おまえだって、冬のあいだは、がまんして、この土地にとどまらなければいけないんだ。なにもわたしたち、おまえをとって食おうというんじゃない。オーロラだっておまえをたべたりはしないさ。」
ペーアは鼻をこすりました。心の中では、まだ強情に、こう考えていました。
〈でも、ぼくはここにのこっていたくないんだ。ぼくはだんぜんいやだ。〉



「あとになってみると、いてよかったなと思うさ。北極の冬をすごすなんて、だれにでもできる経験じゃないからな。」

と、アルネおじさんはいいました。

「おじさんは、まるで探検旅行家みたいなふうじゃないの。」

と、ペーアはいいました。

「おまえだって、探検旅行家みたいな顔をしたっていいのさ。だって、まったく未知の新しいことを経験すれば、それはやっぱり探検というものだもの。」

と、アルネおじさんはいいました。

ペーアはもっと大きな音をたてて鼻をこすりました。こ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com